

法政就業力通信

～今月のさんぽ道～

法政大学

産学連携 3D 教育プロジェクト
<http://3dep.hosei.ac.jp/>産学連携 **3D** 教育プロジェクト

3年目のリフレクション&チャレンジ

特任教員 鈴木 美伸 (すずき よしのぶ)



略歴

84年成城大学法学部卒。

日米ハイテク企業での営業・人事を経て人事コンサルタントとして独立。キャリアカウンセラー資格取得後は多くの大学でキャリア論の講師を務める。

e-mail:

ysuzuki@stage41.com

yoshinobu.suzuki.88@hosei.ac.jp

研究室は新見附校舎2F

私の担当する授業「キャリアデザイン入門(半期、1年生対象)」は、この春学期で3年目を終えました。先月のシンポジウムでも以下のように報告致しましたが、これは製造業のモノづくりのステップと同じです。そして、これからは大学が取り組んできたことのない課題に取り組むことになると思います。

この3年を振り返ってみると、試行錯誤の連続でしたが、ようやくその努力の成果が見え始めました。これからは、この成果をどうやって世の中に広めていくかが大事だと思っています。

この3年間の授業の振り返り

- ・1年目(試行期)
 - ⇒少人数型授業(他大学)の大規模授業(法政)への試行
 - ⇒教材ビデオの開発
- ・2年目(対応期)
 - ⇒教材ビデオによる大規模授業対応ノウハウ蓄積、他学部出前講義
 - ⇒キャリアモデル(ゲスト講師)の充実(学生ニーズ対応と講師厳選)
- ・3年目(展開期)
 - ⇒リアクションペーパー&フィードバックの強化(双方向と共有)
 - ⇒アカデミックスキルの試験導入
 - ⇒他大学への出前講義、企業との人材育成教材の共同開発

これからの課題と展開

上記のステップは、モノづくりにおける「研究」⇒「開発」⇒「量産」の3段階にあたります。大学と企業の最も大きな違いは、大学は研究(および開発)までに行いますが、量産にはまず手を出しません。量産を行うためには、生産技術・工程管理や事業資金の調達まで経営ノウハウとコストという大きなハードルがあるからです。逆に企業(製造業)にとって、それは中心となる仕事です。故に、大学・企業がそれぞれ得意な分野を分担協力する、大学は研究&開発を、企業はそこを助成し、成果を量産するという「産学連携」の形態が通常です。

しかし、我々のプロジェクトはその「量産」のところまで踏み出し始めました。大学で研究・開発した成果を、他大学・企業にも使って戴き、そこからのご意見や不具合を再調整して運用性・信頼性を高める作業に入っています。

高いハードルですが、私の目指す「産学連携から産学連続へ」のチャレンジであり、文科省だけではなく、社会の期待に応えられる有意義なことだと思っています。学会発表だけで終わらせるようなプロジェクトにはしたくありません。



成功の基本は「〇〇を出す」こと

教授 藤村 博之 (ふじむら ひろゆき プロジェクトリーダー)

私には、とても違和感のある表現があります。「勇気をもらいました」という言い方です。運動選手が観客の声援を受けて競技に臨み、成功したときのインタビューで語られるようになりました。でも、勇気って出すものであって、もらうものではないと思います◆何かに立ち向かって行こうとするとき、自分の中から「出す」ことが必要です。勇気を出して挑戦する、おかしいと思ったら声を出す、難しい状況を乗り越えるために知恵を出す、くじけそうになったとき元気を出す、解決策を求めて汗を出すー「〇〇を出す」というのが何かを成し遂げるためには必要です◆これは、自分の中に動力源を持つことです。言い換えれば、エンジンですね。何かを達成できるように、自分自身のエンジンを鍛えていくのが大学での生活だと思っています。

略歴 84年名古屋大学大学院卒。
京都大学博士(経済学)。84~89年
京都大学経済研究所助手、90~97
年滋賀大学経済学部助教授・教授。
97年~03年法政大学経営学部教
授、04年~IM研究科教授。



スポーツのチカラ! ?

特任教員 白井 章詞 (しらい しょうじ)

今年度(秋学期)から、スポーツ健康学部(1年生)においても、新たにキャリア教育を担当することとなりました。学部がら、スポーツ経験者や今現在もトップアスリートとして活躍している学生が多く、教室は活気に満ち溢れています。特に私が感心したのは、「挨拶」と「マナー」です。講義終了後、学生がリアクションペーパーを提出する際、私はいつも一言ずつ声をかけるように心がけています。大抵は、簡単な会釈で終わってしまいます。ところが、スポ健の学生は、私が声をかける前に「ありがとうございました」と言って、両手をそえて提出してくるのです。講義終了後、私が帰り支度をしていると、お手伝いしてくれる学生まで…。きっとその一つ一つは、スポーツを通じて身につけたことなのでしょう。授業を通して、学生たちの魅力や長所をたくさん発見していきたいと思っています。

略歴 法政大学大学院経営学研究科
キャリアデザイン学専攻(修士)卒業
後、法政大学大学院政策創造研究科
博士後期課程に進学。
2011年3月、同博士課程中退。



自分“が”動く

特任教員 有田 五郎 (ありた ごろう)

働く力アセスメントのオープン開催を実施した。連携6大学35名の学生が参加して、お互いに他者と交わる絶好の機会と期待した。他校学生とチームを組み、ビジネスゲームに取り組むというスタートで学生達の緊張が伝わってきた。初対面同士、スタート時点での遠慮は理解できる。

しかし、残念だったのはゲームに取り組む全員が揃いも揃ってチーム全体でしか行動していなかった現実である。他者を意識し過ぎる、目立ちたくない、失敗したくない、との現代若者の特性が顕著だった。もっともっと自分で考え、自分に自信を持って自分が動いて欲しい。秋学期でもグループワークでこの点を補強していく。

略歴 70年慶応義塾大学経済学部卒。
70-06年伊藤忠商事(株)勤務、06-11
年帝京大学と法政大学職員。
11年-法政大学教員

◆ 9/12「働く力アセスメント」

グループ18大学から参加を募り、「働く力アセスメント」を実施しました。青山学院大学、東京未来大学、昭和女子大学、明治学院大学から24名、本学から11名、合計35名の参加者で行われました。5大学が集まっていた今回は、本学だけの開催時に比べ、緊張感が感じられました。それぞれのカラーを持った学生のみなさんが、チームとなって目標達成を目指し、ビジネスゲームに挑みました。様子を伺うと、中にはなかなか流れにのれない学生も見受けられ、有田講師も指摘の通り、チーム単位で動いてしまう現象が起きていました。後日配布されるフィードバックシートで自分の強み・弱みを把握して、また次回も参加していただきたいと思っています。

◆ 編集後記

2020年東京五輪開催が決定いたしました。7年後の東京はどう変わっているのでしょうか。この7年後というのが微妙な距離感です。7年とはそんなにすぐではないけれど、そんなに遠い未来でもない。なんとなくこんな風になりそうだなと予想できる感じがいいです。キャリア教育のおかげで今の学生は定年後の人生プランまで考えている人もいます。

私が小学生の頃「2001年宇宙の旅」という映画を見て、「2001年頃はこんな風になるんだ」とワクワクしていましたが、実際の2001年はさっと訪れました(笑)。7年後ぐらいの自分をイメージしながら生きていくのがちょうどいいような気がします。

そういえば市ヶ谷キャンパスも2020年までには校舎建て替えてガラッと変わります。東京五輪の建設ラッシュで、資材不足で延期なんてことにならないかちょっと心配です。《事務局:平山》

法政大学 産学連携 3D教育プロジェクト (事務局:学務部教育支援課)

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL: 03-3264-9520 WEB: <http://3Dep.hosei.ac.jp/>

産学連携 **3D** 教育プロジェクト